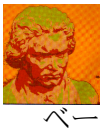
弦楽四重奏とは

弦楽四重奏を文字どおりに考えると「弦楽器４つによる合奏の形態」になる。しかし現在一般に考えられているのは、もうすこし範囲が狭い。まず楽器の組み合わせが決まっていて、今日演奏するような（左から右へ）ヴァイオリンが２つ、ヴィオラが１つ、チェロが１つという編成が標準となっている。[1]

また、弦楽四重奏は通常４つの楽章からできており、それぞれ楽章のおおよその形式・性格も決まっている。

第１楽章　ソナタ＝「２つの調」による「２つの対照的性格を持つ旋律」を中心に曲を進める形式
第２楽章　叙情的な音楽
第３楽章　起承転結の「転」にあたる部分（メヌエットまたはスケルツォ）
第４楽章　ロンド＝繰り返し現れる旋律と、その他の旋律が演奏される部分が交互にでてくる（ソナタが来る場合もある）

このような編成・楽章構成は18世紀、ハイドンやモーツァルトといったベートーヴェンの先輩作曲家たちによって確立された。しかしベートーヴェン自身は先輩たちの確立した様式を変えてまで自分の表現を優先させることもあるので、上記の形式の説明は今後の演奏会のための参考程度に考えてもらいたい。



ベートーヴェンの弦楽四重奏曲とは

ベートーヴェン（1770～1827）の創作活動において、弦楽四重奏は特別な意味を持つ。それはこのジャンルの作品が、小さな空間に集う少人数の聴き手のために書かれたからだ。作曲家は大なり小なり聴衆と対峙せねばならない。しかし想定する聴衆によって、作曲の方向性も違ってくる。例えば交響曲は大きなコンサートホールで演奏され、ベートーヴェンも（社会階層は限られてくるとはいえ）不特定多数の人間に訴えることを考えていただろう。しかし弦楽四重奏においては聴衆がある程度特定されるため、自分の音楽を本当に理解してくれる人が聴き手に多くいることが期待できる。そこでは、おのずと自分の書きたいアイディアを練り上げようという気迫がうまれ、多少の実験的な試みも許されると考えるだろう。それゆえ弦楽四重奏の中にベートーヴェンの最も深遠な作品があるのも全く不思議ではない。

一般的にベートーヴェンの創作活動は、前期・中期・後期の３つに分けて考えられてきた。ハイドンやモーツァルトといった彼の先輩作曲家たちの作曲技法を消化・吸収していた初期、ベートーヴェン固有の音楽語法が開花し始めた中期、そして、独自の境地を開き、後の音楽史の流れに大きな影響を残した後期である。今日のコンサートでは、この３つの創作活動期から、ベートーヴェンのもっとも成熟した作品群が揃っており、彼の音楽世界を十全に堪能することができるだろう。

弦楽四重奏曲第４番ハ短調作品18の４

作品18はベートーヴェンが最初に書いた弦楽四重奏作品である。これは彼が作曲家としてウイーンで本格的な活動を始めていた頃に出版されたもので、６曲がまとめて出版された。作品を委嘱したのは早くからベートーヴェンの才能に着目していたチェコの貴族ロブコヴィッツ伯爵で、作品も彼に捧げられている。

今日演奏される第４番は作品18の６曲中でも最後に書かれた四重奏曲で、並々ならぬ情念が聞かれる異色作だ。理知的な音楽構築が期待されるハイドンやモーツァルトなどの「古典派」作曲家のイメージをかなぐり捨てるような勢いさえそこにはある。

第１楽章は朗々とした響きが悲劇的な叫びへと変貌する冒頭の第１主題が印象的。全員の強奏による和音の連続もベートーヴェンらしい。長調による第２主題は第２ヴァイオリンによって奏される。この長・短調の変動は終始劇的なコントラストを描きながら、この楽章の力強い主張を支えている。

３／８拍子の**第２楽章**はハ長調の明るい響き。前楽章と同様にソナタ形式で書かれているが、第１楽章とは対照的にリラックスした感じで進んでいく。３／４拍子の**第３楽章**も、雰囲気的には第２楽章を継承しているが、移り気なところもある。ロンド形式による**第４楽章**は、第１楽章を思い起こすような激情の楽章で、ここでも長調・短調のコントラストが勢いのあるフィナーレをもり立てている。

弦楽四重奏曲第10番変ホ長調作品79

1809年に初演された10番目の弦楽四重奏曲は、ベートーヴェンの、もっとも脂が乗っていた時期に書かれている。前年の1808年には《運命》・《田園》の２つの交響曲が初演され、1809年には第５ピアノ協奏曲《皇帝》が完成されている。

---

[1]　低音の増強が計られたオーケストラでは、これら４つのパートに加え、コントラバスという５つ目の弦楽器も登場するが、それ以前の音楽から進化してきた弦楽四重奏にコントラバスは含まれていない。またオーケストラでは同じパートを複数人で演奏するのが一般的だが、弦楽四重奏ではそれは行われない。

古典的な形式美に乗っ取った品の良い作品だが、新しい要素も少なくない。例えば**第１楽章**の導入部（冒頭）は叙情的にたっぷり聞かせ、強弱の振幅も大きい。ソナタ主部では弦を弾いて演奏するピツィカート奏法が聴衆の耳を引き、同作品に「ハープ」という俗称が付くこととなった。３／４拍子の**第２楽章**は、喜びに満ちあふれた楽想の中に立ち現れる甘美な旋律が聴き手を魅了する。この他にも短調・長調の２つの旋律が現れ、楽想を膨らませていく。形式的にはＡ－Ｂ－Ａ－Ｃ－Ａ－コーダとなっていて、繰り返されるＡ主題にも変奏が加えられている。**第３楽章**はスケルツォ的性格の楽章で「Ａ－Ｂ－トリオ、Ａ－Ｂ－トリオ、Ａ－コーダ」という構成である。休みなしに続いて演奏される**第４楽章**は変奏曲。簡素な主題はまず静かに奏された後、６つの変奏で強弱やリズム、楽器法を変えて登場し、エンディングへと流れ込んで行く。ベートーヴェンが変奏曲を最終楽章にもってくるのは、弦楽四重奏ではこれが唯一である。

弦楽四重奏曲第14番嬰ハ短調作品131

ベートーヴェンの大編成のための作曲活動は人類讃歌ともいえる交響曲第９番で一応の完結を見た。これより後に書かれた13番から続く４つの弦楽四重奏は、彼の最晩年の類い稀なる創作力を示す力作揃いで、今日ベートーヴェンの弦楽四重奏がこのジャンルにおける「聖典」とまで呼ばれるような地位を築いたのもうなずける。

第14番全体は４楽章形式を拡大した７つの楽章で構成されており、曲の最後まで休みなしに演奏される（当頁下方に、第13番の楽章構成と通常の４楽章の楽章構成を比較した。左側は作品131の楽章構成、そして右側は、その元となった４楽章形式の一般的な形である）。

作品131の**第１楽章**は悲哀に満ちた旋律が情感たっぷりに受け継がれていくフーガである。バッハの時代から使われてきた古い作曲技法だが、ベートーヴェンはフーガ旋律に細かく強弱の記号を書き入れ、情感溢れる音楽としている。もともとはソナタ序奏部として終わっていた部分を一つの楽章として独立させたのはベートーヴェンの旺盛な創作意欲の現れだろう。ロンド形式の**第２楽章**では一転して鼻歌風の旋律が聴き手を誘う。スキップ風のリズムも印象的だ。**第３楽章**は第４楽章への導入を果たす11小節の短い楽章。これに引き続き**第４楽章**では、発想の自由さ・豊かさが聴き手を引き付けてやまない変奏曲が奏される。音楽が充分に展開され一段落すると、スケルツォ的な**第５楽章**に突入。エコー効果や駒の近くで弓を引く奏法など、ユーモアたっぷりに楽しませてくれる。28小節からなる短い**第６楽章**では雰囲気が一変し、瞑想的で祈りのようなハーモニーが聴かれ、やがてそれは決然とした**第７楽章**へと高められていく。ソナタ形式を使ったこのフィナーレでは、勇ましい第１主題と、なめらかに下降する第２主題との対比が見事で、第１楽章のフーガからの要素も動員しながら全曲を力強く総括する。

ベートーヴェンは19世紀ロマン派への扉を開いたと考えられている。それは彼が古典的な形式や作曲技法に根ざしながら、自らの音楽表現のために因習を打ち破り、このような充実した作品として結実させているからだろう。なおベートーヴェン自身は、この作品を自分の作った最良の弦楽四重奏曲と称しているそうだ。

解説執筆：谷口昭弘（たにぐち　あきひろ）
富山市出身。米国フロリダ州立大学・大学院博士課程修了（Ph.D.、音楽学）。これまで『新潟日報』、雑誌『ExMusica』でアメリカ音楽情報を担当。2000年２月のＮ響定期演奏会の楽曲解説も執筆している。また1999年以来、新潟県新津市のラジオ局でアメリカ音楽を月一度紹介する番組を放送している。

表：作品131と一般的な弦楽四重奏の楽章構成の比較

作品131（７楽章）	一般的な４楽章形式
第１楽章（フーガ）	第１楽章序奏部
第２楽章（ロンド）	第１楽章主部（ソナタ）
第３楽章（第３楽章への接続部）	<<該当なし>>
第４楽章（変奏曲、ゆったりとしたテンポ）	第２楽章（緩徐楽章）
第５楽章（スケルツォ）	第３楽章（メヌエットまたはスケルツォ）
第６楽章（第７楽章への接続部）	<<該当なし>>
第７楽章（ソナタ）	第４楽章（ロンドまたはソナタ）